

助詞トについて

近 藤 研 至

○ はじめに

この素朴なタイトルによれば、トの扱いを「格助詞」とも「後置詞」とも位置づけていない。このように統語論的な扱いに無頓着なのは、小論の目的がトの前に立つ文の部分（以後Pとする）の「共通した性質」を記述することにあるからである。トは、Pで表される部分がそのような性質を担っていることを標示する機能としてあるということを示すものであり、小論においては、その統語論的な扱いには最後まで無頓着である。

森山（一九八八）は、「ト格は、意味的に、次のように分類できる」としている。

- (1) 同一的なト…ガ格ないしヲ格に準ずる格と外延的な同一性の関係が成立する格…例…太郎が学生となる。（太郎

Ⅱ学生）（扱いを表す場合にはトシテにも置換可能）

引用的なト…典型的には伝達・思考等の引用的動詞に共起し、統語論的なレベルを異にし、意味的制約のない引用成分をなす。…例…「あ」と言う。

相互的なト…（略）（76ページ）

さらに、

(2)

同一的なト格は、引用のトに連用修飾のトを介して連続している。すなわち、『おい』と言う（引用）、『ボン』と鳴る・『おはよう』と入ってくる（引用的な連用修飾…動きの態様）、『がっちり』と作る（結果の連用修飾）、『刀』となる（同一的なト格）というように、同一的なト格と引用のト格の、必須成分としてのト格を両極として、その中間に、意味的にも様態的な側面が強い連用修飾的（副詞的）成分が位置する。（74ページ）

この指摘の問題点は、「典型」を捉え「意味的」に「分類」されたPトの「連統」は、何によって保証されているのかが明らかにされていない、という点である。小論は、この点を明らかにすることを目的とする。まず一から四で、Pトで現われるPの「意味的な分類」をしてみよう。この作業は、分類自体が目的ではなく、あくまで五で述べる「共通した性質」を求めるための作業でしかない。小論の「意味的な分類」はカテゴリーミステイクをおかしていることもあろう。P自身が「共通した性質」を有している、という小論の態度からすれば当然のことであり、このような確信犯的な態度をもってひらきなおる

ことをご容赦願いたい。

一 「発話」⁽²⁾

一・一 「引用句」としての「発話」についての定義として、「実現した発話」とされることがある(砂川(一九八九)・藤田(一九八六)など)。それは、次のような典型にはあてはまらう。

(3) 次郎は、太郎が次の学会で研究発表すると言った。

しかし、その定義では、次のような例は追いついてしまふことになる。それは「実現していない発話」であるためである。

(4) 私は次郎に太郎が次の学会で研究発表をすると言うつもりだ。

このような例も射程に収めたいため、小論では「発話」に「関係する発語行為を持つ」という素朴な定義を与えておこう。ただし、これは、繰り返し返しておくが、「実現した」という修飾部はとっぱらってある。たとえば、(4)のような場合であっても、「発語行為」を志向すること(実際に口に出して言う)が、前提となっているからである。日本語の「引用」についての研究の結果によれば、Pと主文の述語動詞との関係には、大きく二つのパターンがあるとされる。その一つ、述語動詞において、Pがどのような「関係する発語行為を持つ」ということを明示しているような場合で、たとえばそれが「書記の結果」の場合も「発話」に含むこととする。

一・二 こうした「発話」の定義からすれば、次のような「擬音語」の問題も「発話」として扱われることになる。いま、「発話」に「関係する発語行為を持つ」という定義を与えた。

(5) ウグイスがホーホケキョと鳴いた。

などは、その定義の射程圏内である。しかし、次の例は若干の説明が必要となろう。

(6) ドアがボタンとしまった。

「発語行為」という術語は、「行為」という部分に表わされているよう、そこに意志を持った主体の存在が含意される。そのため、「発語行為」の定義を、さらに上位の次元で「あるモノが音を発することがら」と捉えておけばよいだろう。

ところで、その音の連続に「意味内容」を見いだそうとすることが、解釈者に依存している。

(7) 太郎はグレートテと言った。

というように、解釈者において「意味内容」を見いだせないこともあるし、

(8) 可愛可愛と鳥は啼くの 可愛可愛と啼くんだよ。

というように、「意味付与」を施すことだってあるのである。つまり、小論において「発話」として捉えるところは、Pが「あるモノが音を発した」その音であり、それが「意味内容」をもつ場合ももたない場合も含むということである。

二 「Pトイウ」

二・一 次のような場合は、単純に「発話」として扱えるかどうかは微妙である。そのため、独立したカテゴリとして扱っておこう。

(9) バド・パウエルはジャズ・ピアノに革命をもたらしたという。(ジ)

(10) なにしろ『ガロ』に投稿するのはマンガ界における出世の早道、印税成金への最短距離と言われているくらいのもんです。(ガ)

このようなPは、その音を発した「あるモノ」を特定しない。実はいままで議論の対象としてきた「発話」は、(発話されたかされていないかの問題は問わないが)特定の時空間と関係するものであった。それに対して(9)や(10)などは、そのような関係する特定の時空間をもたない。ここにおいて、(9)などを「一般的言明」としておく。この典型は「AハPトイウ」というかたちで表わされ、Aの部分(発話主体)が特定されていないのである。(もちろん、「バド・パウエル」「『ガロ』」に投稿するの)は、「言う」の主体ではない。)

ところで、このようなカテゴリを設けると、(8)の例や次の例などの扱いが微妙になってくる。

(11) 大はワンワンと鳴くものだ。

その鳴き声がある種属性として描かれている場合、それは特定の時空間を排除していることになるためである。「AハPトイ

ウ」というかたちを典型としているが、Pと特定の時空間との関係の問題こそ、ここで(「発話」とは別に)カテゴリを独立させた理由なのである。

二・二 このように、Pが特定の時空間と関係してはいないが、その点をもって「発話」と区別されているものとは別に、次のような例もPトイウの現われとして観察される。

(12) さっちゃんはさちこという。

(13) ミャンマーは、むかしビルマといった。

これらは、「AハXヲPトイウ」というかたちをとっていて、Aは特定されずPはいわゆる「名前」を表わしている。Pは「さちこ」や「ビルマ」を「指示」しているわけではない。次の例は、それまでがXがモノを「指示」していたのに対し、コトを指示するものとしてあげておいた。

(14) こういう場合を災い転じて福となすというのだろう。

次の例はAが特定されているものである。

(15) ボクはこのトリオを往年の「オール・アメリカン・リズム・セクション」に対して、「ジャズ・バカ3大将」と命名したい。(吉)

(15)は述語が「イウ」ではないが、Pが「名前」であるという特徴づけを施している限り、このカテゴリとして扱われよう。

いま、「名前」について触れてきたのであるが、次の例はどうであろうか。

(16) θ はシーターと読む。

これは、「 θ 」の「読み方」がPで表わされている。こういった

例をも射程に収めたいため、「名前」というのを「呼び方」としておこう。「呼び方」の定義は、Xについてどう呼ぶのかということである。もちろん呼ぶ主体は、特定されている場合も特定されていない場合もある。「名前」について説明したことであるが、「呼び方」は「指示」をしていない言語表現である。そのため、次の例のように、「呼び方」だけが提示されていて、その定義がなされていない場合もこのカテゴリーに入れておく。

(17) テニスとはどういうものか、ぼくが教えてやろう。

二・三 トイウが連体修飾として現われることがある。これは、

(18) 「命がけで働いてはした金しかもらえねえ、忍者なんかになるやつのが知れないよ」というネズミ男は、カムイと並ぶ『ガロ』のスターであった。(ガ)

というように「イウ」に動作性が現われ、「発話」と解釈される場合と、

(19) この意見に賛成だという人は、手をあげて。
のように、Pの話者が特定されていない場合とがある。さらに、

(20) 私という恋人がいるのに、あなただって人は。
のように、Pが「呼び方」の場合もある。

以上は、いままで扱ってきたカテゴリーに収まり得る。しかし、次の例はどうであろうか。

(21) 一方では、好きなレコードさえ良く鳴ってくれば良い、
という立場の人もある。(へ)

(22) 教師という立場からいわせてもらうと、
これらは、しばしば「内容節」として扱われるものである。こ

の場合の修飾・被修飾の関係は、被修飾名詞の「内容」を充実にさせることがPの役割であり、被修飾名詞はPを特徴づけているという関係がある。この特徴づけに関与する名詞句にはいろいろ観察されるが、その名詞句によって、Pが現実世界の記述と特徴づけられていない場合を、ここでは「内容節」としておこう。

以上から、小論でいう「Pトイウ」というカテゴリーに所属するものは、「特定の時空間に関係しない発話（一般的言明）」と「呼び方」と「内容節」としておく。

三 「思考内容」

三・一 「思考内容」には、それが「思考内容である」という素朴な定義を施しておこう。この「思考内容である」というのは、「発話としてではないが、だれかの心的世界に帰属する」という消極的な定義ですませておきたい。いうまでもなく、「だれかの心的世界」という記述において、「判断能力をもつ」という生物学的な前提は不要である。どのような「モノ」であっても「心的世界をもつかどうか」というのは解釈者に依存しているからである。

(23) 文部省は「長引く不況や円高などを見ても、厳しきは昨年度と変わらない。国立大生は、教授に推薦状をもらい、何とか就職できる印象があるが、そんな時代は終わった。学生へのきめ細かな支援態勢が大学全体に必要だ」とみ

る。(朝)

このPは実際「文部省」のだけれが語ったことかもしれない。しかし、当該文での扱いは、そのような「語った」事実としてではなく、判断した内容、つまり、「思考内容」として提示することである。

廣瀬(一九八八)は、「引用」される言語表現について、「公的表現」と「私的表現」とを区別する。

公的表現とは言語の伝達の機能に対応する言語表現のレベルであり、一方、私的表現とは言語の(伝達を目的としない)思考表現機能に対応する言語表現のレベルである。

このように区別した上で、「思考動詞はその引用部として私的表現しかとることができない」という記述をしている。廣瀬はこの記述を言語表現の形式の面にあてはめようとしている。そして、「雨だよと思う」や「おい雨だと思う」などを文法的にアウトとしている。廣瀬は、このようなことから、『よ』とか『ね』という終助詞は本質的に公的表現であり、私的表現を公的表現に言語的に転化する働きをもつ」としているが、

24 こんなことをされたら、だれだってやめてくれよと思うように、「よ」だってさらに「命令文」だって「思考内容」として現われることができるのである。このことは、廣瀬がカッコづきで述べている「伝達を目的としない」という箇所こそが重要な要因であると考えられる。つまり、当該文の聞き手に対して「よ」を用いたり「命令」したりすることはできないが、そうでなければそのような形式は現われることができるのである。小論は廣瀬のカッコづきの部分には賛成であるが、一足飛

びに形式の問題にからめるその態度には反対である。¹⁰⁾

三・二 次のように、Pが「仮想世界」を示していると思われる場合も、「思考内容」のパラエティとして扱うことができる。

25 仮に次の毒殺が行われるとすれば、その中のどれだと思えますか？(月)

26 わたしなら、ここで、ピンズの一通と手を広げます。

これは現実世界の記述ではなく、話し手主体において検出された世界の設定である。ある信念体系に帰属することがらであって、その意味から「思考内容」と扱うことができよう。ただし、

27 君がいうように仮に毒殺が行われるとすれば、
なら、「発話」とした方がよいのか、微妙なところである。

三・三 Pが「思考内容である」ということは、文脈の上で特徴づけがなされることによって解釈される。これは今まで記述してきたカテゴリーすべてに共通したことがらである。次の例は藤田(一九八六)においてα類と名付けられたものである。¹¹⁾

28 「それでは最後の手段をとるほかない」と熊楠は、ある夜、マルカーンとともに覆面して木枯吹きさす釜街に出た。(く)

これは、果たして「発話」なのか「思考内容」なのか。つまり、Pが何であるのかという特徴づけが、α類の場合、解釈者に依存されることになるのである。さらに、「Pトスル」というかたちの場合も同様である。

②⑨ 今彼は立ち上がるとうとしている。

③⑩ この本の中で、彼は、今こそ立ち上がるとうとしている。

②⑨と③⑩は述語動詞が「スル」であるが、Pが何と特徴づけられているかによって、文全体で「発話」について述べているか「思考内容」について述べているかに分かれることになるのである。

ちなみに次の場合も同様に曖昧である。

③⑪ 彼は、外に出るとコートをはおった。

一つは、トが「接続助詞」であると解釈される場合、もう一つは「発話」であると解釈される場合である。これが、

③⑫ 彼は、外に出ようとコートををはおった。

ならば、先と同様「発話」と「思考内容」とにおいて曖昧である。いずれにしても、その曖昧性の解決は、解釈者に依存されることになるのである。

四 「相」

四・一 まず池上(一九八二)の次の指摘を引いておこう。

例えばすでに取りあげた例の中に John became a doctor というような文があった。このような場合の a doctor は表層的には名詞句で一見「具体」という特徴を持つているように思えるが、意味的には(その際、a state of being a doctor というパラフレイズで示したように)実は「医者であるという状態」という「抽象的」な特徴をも

つものと考えられる。この場合、a doctor を何か「具体的」な John と対立するような「もの」ととらないのは、医者になっても John という人物のアイデンティティ (identity: 同一性) は変わっていない、単に一つの表面的な属性を得たにすぎないと考えられるからであろう。(85〜86ページ)

この指摘は援用したい。ただし、池上において、その扱われる例は、英語かもしれないが「XがPニナル」という場合に限られる。そのため、Pに「到達点」という役割を与えて乗り越えなければならなくなり、「抽象的」・「具体的」という対立を見いだすことになる。小論の対象とするところはPトという場合である。そのため、(対立する概念としての)「抽象的」という概念は不要になる。そこで、小論では「相」という術語を導入しよう。「相」とは、「変化」の文脈の中で、Pがモノ自体と関係づけられているのではなく、Xについての状態や様態、性質などと関係づけられていることをいう。つまり、「指示」の役割を果たしていないことをいうことにする。次の例を参照されたい。

③⑬ 雪が溶けて川となった。

これは、「変化の結果」が「川」とであるという説明では乗り越えられない。「変化の結果」という術語では、「モノがモノへ」という、XもPもともに「指示」と関わる解釈も可能であるからである。

③⑭ ついに気温が40℃となった。

このような例も射程に収めるためには、「モノがモノへ」という解釈を排除しておかなければならない。③⑬や③⑭を、ともに同じ説明原理をもって扱うために、Pを「相」として扱うことに

する。そうして、次の例も「相」として扱おう。

㉞ 彼女は結婚して、近藤となった。

㉟ あの山の雪が溶けて、この川となったのだから。

「指示」に関わることが多い「近藤」や「この川」であってもそれは「近藤という相」や「この川という相」であるということなのである。

以上が「XガPトナル」という型であるが、そのような「変化」にそれを発動させる主体が参加する表現、つまり、「AガXヲPトナル」という表現もある。

㊱ クラスの皆は太郎をついに生徒会長とさせた。

これは、Aの参加があるが、「XガPトナル」と基本的に変わらない。Pはやはり「相」なのである。

森山が、「扱いのトシテ」とあげているのも、ここで扱うことができる。

㊲ ぼくは医者としてこの病院に赴任したんだ。

㊳ 気持ちわかるが、内閣としては認めざるをえない。

これらも「医者」そのもの、「内閣」そのものを「指示」しているのではなく、「医者という相」「内閣という相」として扱われているのである。ただし、

㊴ この木片を飛車としよう。

のように、「AガXヲPトナル」のかたちであっても「扱い」といえる。㊲や㊳のような「トシテ」だけでなく、「扱い」は、このようなかたち全体にわたるのである。

四・二 名詞句は、その現われる文脈・構文において、「指示」

にも「叙述」にも関わることができる。「変化」の文脈におけるPの位置は、必ず「相」でなければならない。つまり、「指示」であることを回避するためにも、ぜひなんらかのマーカが必要となっていて、日本語では、その時、明示的なしるしとしてトが選ばれているのである。形容詞はそれ自体「性質・状態」を「意味内容」としてもち（基本的に述語であるため）、かつ、現象として「活用」という形態をもっているため、「その花が美しいとなる」とする必要はなく、「その花が美しくなる」となるのである。

「擬態語」は、「活用」をもたないことから（名詞句と同様）なんらかのマーカを必要とする。しかし、その場合のPは、「指示」に関わることがなく「擬態」（モノのあり方）に関わることから（形容詞と同様）トを必要としない。こうしたことは、寛・田守（一九九三）で、「擬態副詞」はトが随意成分であるという指摘がなされていることにもつながってくる。

㊵ a 鉄がドロドロと溶ける。

b 鉄がドロドロ溶ける。

ただし、「変化の結果」の文脈において「擬態語」が現われるときは、ニでマークしなければならぬ。

c 鉄がドロドロに溶ける。

これは、名詞句の場合と異なっている。「擬態語」の場合こそ「指示」と関わることはないの、結果であること、つまり「到達点」であることを明示する必要があるからであろう。ここにおいて「擬態語」の導入の場合、ニは有標markedであるといえるのである。いま、「擬態語」について見たのであるが、

これは「様態副詞句」全体にあてはまることでもある。

次の場合も「相」として扱おう。

(42) 信号が青から黄へと変わった。

これは、「青から黄へ」が全体で「相」を表わす。もちろん「様態語」について説明したとおり、この場合も、

(43) 信号が青から黄へ変わった。

ということもできる。それは、それ全体で「指示」に関わることがないからである。

五 Pの共通した性質

五・一 たとえば、柴谷（一九七八）は、トは「引用標識」であるとして「共通した性質」を記述しようとする。しかし、「引用」の定義がなされていないし、なによりも扱う範囲が狭い。これは柴谷だけではなく、「引用」を主題として記述している論考はいずれも、Pト自体については興味の対象外なのであり、すべてを見通そうという態度は見られない。

そんな中で、山崎（一九九三）は、小論で「相」と分類したところまでを記述の内に捉えている。その意味で、それまでの「引用」からのアプローチより柔軟性がある。小論が「発話」「思考内容」としたところの一部については「発話の内容」、「相」の一部については「属性内容」として、その「共通した性質」を「内容」としている。これはスタンスとしてはよいのであるが、その結論は少なからず無理がある。小論は、山崎と

はまったく違った視点、つまり、（山崎の用語を借りれば）「発話」と「属性」の共通した性質を探ろうというものである。山崎の「内容」とはこうした態度は含意していないく、トによってマークされるところには「発話内容」と「属性内容」とがあるという記述のレベルでとどまるものなのである。しかも、小論が扱ったカテゴリーすべてについては、山崎は扱っていない。

「引用」という術語を自覚的に用いてはいないのであるが、その射程圏は「引用」であるものに田窪（一九八九）がある。田窪はトイウ・ツテのしかも一部についてであるが、たいそう示唆的な指摘をする。それによれば、トイウ・ツテについて、「記号の名前だけが定義されており、記号の意味、指示対象のうちどちらか、あるいは両方が定義されていない要素を表わす形式」と説明されている。これは、記述のレベルで提示されているのではなく、その「共通した性質」を捉えている説明原理として大いに評価されるべきものである。田窪は、「指示対象の欠如」という観点をもちこんでいること自体、本来的には「指示対象」を持つと思われる言語記号について目を向けているのであるが、小論で「相」としたところは、「指示対象」をそもそも持たない名詞句であっても、さらに、「様態副詞句」までを射程に収めているため、田窪と扱うところの範囲がちがっているのである。

五・二 「意味的な分類」のそれぞれについて、その性質を記述してみよう。

「発話」…「発話」と関係するのであって、その意味内容

は現実世界に同定されたものではない。「擬音語」は音を記述したものである。

「Pトイウ」…「一般的言明」のとき、その意味内容は現実世界に同定されたものではない。「呼び方」のとき、「指示」をしない。「内容節」のとき、その意味内容は現実世界に同定されたものではない。

「思考内容」…主体の心的世界を描いたものであり、現実世界に同定されていない。だれかの心的世界に帰属する。

「相」…指示をしているのではなく、状態・様態・扱いなどを表わしている。

このように並べてみると、その「共通した性質」が浮かび上がってくる。それは、Pが、それが世界のある状況について適合しているかどうかを問題にしていない、つまり、現実世界のモノやコトを志向していない、という「性質」である。

言語表現は、「音の連続—記号の名」と「意味内容」を、その側面としてもつ。これを世界に関係づけるかいないかという作業は、言語表現それ自体の側面とは別の作業である。このような言語表現それ自体の側面が役立てられているのが、「呼び方」や「発話」の一部である。「思考内容」とは、森山（一九九二）で「個人情報」の名のもと説明されているとおり、そこで描かれている「意味内容」を世界に関係づけず、主体の心的世界にのみ帰属させるにとどめるといった積極的な言語表現であらう。もちろん「発話」を「発話」として提示していることも、それと同じ要領で説明できる。「相」であるということは、それ自

体、現実世界のモノやコトを同定するものではなく、言語表現と現実世界のモノやコトとの関係において成り立つ「指示対象」のこととしてのあり方を規定している。Pが、現象としての「文」であるとき、現実世界のコトを志向しないし、現象としての「名詞句」であるとき、モノを志向しない。「文」でも「名詞句」でもない、「音の連続」の場合は、もちろん、モノもコトも志向しない。

まとめておこう。

④ 現実世界のモノやコトを志向しない、そういった言語表現が、Pトで表わされる。

「それぞれ」は、「共通した性質」をもっているのであるが、さまざまな特徴づけがなされることにより、「それぞれ」として、「見独自のカテゴリ」を形成していることになる。この特徴づけはなにが役立てられているかといった異なりに由来するのであり、その「共通した性質」をもって、「それぞれ」がカテゴリリーとして独立していない、つまり「連続」していると捉えられることもあるのである。このことこそ、「それぞれ」が「それぞれ」として分布しているが、同じ助詞トによってマークされる理由である。

六 おわりに

小論の目的は、森山が「連続」と捉えたトの分布を解釈することにあった。そのため、「意味的な分類」の箇所のそれぞれに

ついでには、まだ興味ある主題が残されている。今後は、小論で明らかにした「共通した性質」をもとに、それぞれについての記述を深めていかねばならないだろう。

さらに、注1で触れたことなのであるが、「連結」のトなども記述の対象としなければならないであろう。「いくつかのトがあるか？」こうした問題設定は小論の筆者にとつて残された大きな課題である。それは一つであるかもしれないし、それ以上であるかもしれない。

〈付記〉小論は、第二九回上越教育大学国語教育学会例会（一九九五・六・一〇）において発表した内容に加筆・修正を施したものである。

〈注〉

1 先に、「統語論的」なことに小論は「無頓着」とした。しかし、小論の興味は、森山から引いた②の解決にある。そのため、「相互的なト」や「接頭助詞」としてのト、そして「ぼく」とあなた」に代表されるような、いわば「連結」のトについては、議論の対象としない。看板に偽りが生じてこようが、その点で、小論は、中途の報告である。

2 従来「引用句」として扱われる言語表現は、「発話」「思考内容」のほかいくつか、均質的ではないものを抱え込んでいる。小論においては「引用句」という術語の定義と、その要素について議論することを目的としない。そのため、そのような術語に拘泥しないで記述をおこなうことにする。

3 藤田（一九八六）（一九八八）参照。

4 述語動詞が、「聞く」など「藤取」の場合、「ある」という「存在」をとらえた場合、そして「書く」など「書記」の場合、「言う・読む」など「発話行為」の場合を含む。発話行為とからめた「引用句」の性質づけについては、砂川（一九八九）に詳しい記述がある。

5 しばしば「引用句」に「直接引用句」と「間接引用句」とを認め、それぞれを区別しようとするところがある。しかし、小論の興味は、その区別ではなく、共通した性質の記述にあることから、「発話である」それ一点で充分なのである。そのため、直接・間接の区別については無頓着である。

6 これは次の点で曖昧である。「さっちゃん」が発話の主体である場合（「さっちゃん」は名前ではなくと聞かれると、いつでもさっちゃんという場合）と、そうではない場合（「さっちゃん」は本名をさっちゃんという場合）とがある。この例は、いうまでもなく後者である。このような曖昧性が生まれるのは、ハの前の名詞句が発話の主体になりうる可能性をもっている場合であり、③のような場合はそのような曖昧性は生まれない。

7 こういったものについては、田窪（一九八九）に明確な説明がある。それによれば、④の例は「メタ用法」とされる。田窪の説明については、後に触れることになるので、ここではこれにとめておく。

8 このような「イウ」のテンスがル形であっても（つまり、トイウのかたちをとるものであっても）本節で扱うものとは

別の、「発話」である、ということについては今まで触れなかった。しかし、

・ 一二代目結城孫三郎は「人形が浮くのを防ぐためおもりを付けるし、衣裳も水を吸うので、ふだんの三倍もの重さになって大変。でも人形が思わぬ動き方をしたり、発見もたくさんあって面白い」という。(朝)

という例をみるにつけ、先に触れたように、Pが特定の時空間に関係しているかどうか、「発話」と「Pトイウ」の分かれ目であるということを、再度確認しておく。

9 「内容節」である場合、被修飾名詞がPを特徴づけるという説明をしておいた。それに従えば、次も「Pトイウ」の箇所であらなければならない例であろう。

・ そのときわたしは、食べちゃいたいという思いにかられた。

これは特徴づけている名詞句が「思い」であるから、本来的には次の「思考内容」として扱われることがらである。しかし、そうしたふるまいそれぞれについて記述する煩雑さを避けるために、「Pトイウ」というカテゴリーを設けたのである。Pは「特徴づけられる言語表現」であり、その意味内容が現実世界を記述したことではない、という性質を与えておくにとどめたい。

10 さらに廣瀬の記述でわからないところは、「引用」の範疇で言語表現を記述しようとしているのに、「思う」については「思った」という形式を扱っていない点である。「言う」については「言う」を扱わないで「言った」を扱っている。こ

のあたりがどのような意図の現われなのかが不明である。

11 藤田は「おはようとしてくる」など、「①基本的に引用句の発話の主体と述部の示す動作・状態の主体が同一であり、②発話と動作・状態が同一場面に共存するもの」を、「引用句」のα類としている。

12 「変化」の文脈で、ニとトが現われることについては興味深い主題である。小論ではここに拘泥していると先に進まない。稿を改めて論じてみたい。

13 Pトナルというかたちがいつでもここで見たような解釈になるかといえそうではない。

・ こういう場合、普通は二人でカウンタに座って、「好きなもの、どんどん頼んでよ、いや、忙しいところ、どうもどうも」となる。しかし、T氏は違った。

(吉)

これは、「発話」の場合であろう。注12で述べたことも含み、「ナル」については稿を改めたい。

14 名詞がもともと語義の上で「指示」に関わらないものもある。「必要」や「条件」や「数量を示す場合」などである。こうした名詞は「回避」という積極的な記述をしなくとも、「相」との相性はそもそもよいものである。

15 ただし、「The flower is beautiful」は、日本語ではその花は美しいとなる」のように、「その花は美しい」全体がPならばよい。

16 「意味内容」とは何であるのか、という知の体系の中で議論されてきたことがらについては、小論で答えるだけの準備

は到底ない。しかし、それが、言語表現それ自体の問題であり、かつ、世界と関係づけられていない、という次元において、さらに「音の連続」ではない、といういわば消極的な定義において、「意味内容」という術語を用いている。

17 森山(一九九二)は、「文末思考動詞」「と思う」についてインパクトのある記述をおこなっている。これは、「思う」主体が一人称、「思う」はル形の場合という特殊ケースについての記述であるが、その結論は「個人情報」の標示」というまとめ方をしている。ただし、この指摘は、小論がPトに対して行いう性質をみれば、まだまだほかにも「個人情報」と考えられる場合はあり、特殊ケースのものの記述としては適当であるかどうかは、さらに考察しなければならぬだろう。

18 メタ言語という術語を、対象言語でないもの、といういわば消極的な規定を施せば、小論で指摘したことは、トはそれに前接する言語表現がメタ言語であるということを示すマーカーであることはできよう。しかし、従来のメタ言語の定義は、このような消極的なものではなく、いわば「言語についての言語」というような積極的な定義である。そのため、小論は、そのような術語については援用しない。

〈用例出典〉傍線部が略称。

『ジャズ喫茶「ベイシー」の選択』(菅原昭二) 講談社／『ガロ曼陀羅』(ガロ) 史編集委員会編) TBSブリタニカ／『朝日新聞』一九九五・五・二四／『ジャズ批評』ジャズ批評社／『吉祥寺JAZZ物語』(寺島靖国他) 日本

テレビ／『くまぐす外伝』(平野威馬雄) 筑摩書房／『月喰う蟲』(大越孝太郎) 青林堂

〈引用文献〉

藤田保幸(一九八六)『文中引用句「ト」による「引用」を整理する』『論集 日本語研究(二) 現代編』206～230ページ 明治書院

ジ 明治書院

(一九八八)『引用』論の視界』『日本語学』7・9

30～45ページ 明治書院

廣瀬幸生(一九八八)『私的表現と公的表現』『文藝言語研究言語篇』14 37～56ページ 筑波大学 文芸・言語学系

池上嘉彦(一九八一)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

寛 壽雄・田守育啓 編(一九九三)『オノマトピア』勁草書房

森山卓郎(一九八八)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

(一九九二)『文末思考動詞「思う」をめぐる』『日本語学』11・9 105～116ページ 明治書院

柴谷方良(一九七八)『日本語の分析』大修館書店

砂川有里子(一九八九)『引用と話法』講座 日本語と日本語教育』第4巻 355～387ページ 明治書院

田窪行則(一九八九)『名詞句のモダリティ』『日本語のモダリティ』211～233ページ ころしお出版

山崎 誠(一九九三)『引用の助詞「と」の用法を再整理する』『国立国語研究所報告106 研究報告集14』1～30ページ 秀英出版